姫王さまの魔法使い

ミツイカヅミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫王さまの魔法使い

【Ｎコード】
Ｎ８５９７Ｖ

【作者名】
ミツイカヅミ

【あらすじ】
さびれた村で畑仕事に精を出すだけの毎日を送っていたイリヤは、ある日《姫王さま》のおわす王宮に呼び出される。かつてこの国の至宝と謳われた賢者の末裔として――――。／姫王さまをはじめ、王宮の面々に寵愛の的として翻弄されるイリヤの物語。

一話◆『親愛なる魔法使いさま』

村と王都（みやこ）とを結ぶただ一つの列車に揺られながら、イリヤはぼんやりと手の中にある手紙を眺めていた。

複製不可能の《御印》が添えられたそれが王宮からの便りであることに間違いはないと知りつつも、はてこれは何の冗談だろうと今でも疑わずにはいれないのだった。

イリヤの住む村は山の奥ふかく、王都はおろか街へ下りるのも一苦労といった僻地に存在する。女は旗を織り、男は狩りに出かけ、子供たちは山や川を駆け回っている。街と村をつなぐのは週に一度の市場と三日ごとにやってくる伝聞士（メッセンジャー）くらいなものだ。

親もそのまた親も村で生まれ村で育ち、そして村で死んでいった。だから自分もその一生を村で過ごすことになるのだろうと考えていたのだが――――――イリヤは再び手紙に視線を戻した。無学な自分にもきちんと理解できるよう、とても簡単で分かりやすい言葉がならべたてられている。唯一の問題があるとするなら、信憑性が著しく欠如していることくらいか……。

◆

親愛なる魔法使いさま（と、彼らはイリヤを呼んでいた）

突然このような文を送るご無礼をどうかお許しいただきたい。

我が国が敬愛してやまない偉大なる賢者レーヴェンシュタインの遺された最後の一人として貴殿が息災に過ごしておられることを、大変喜ばしく思う。
この度、姫王さまが御側役として貴殿を所望された旨をお伝えするものである。
ついては三日後――――――

◆

この後は村から王都へ向かうための旅券を同封しておいたことや、王都に着いたら迎えの者をよこしておいたことなど、こまごましたことが書いてあった。
つまりは姫王さまに呼ばれていて、これに関する拒否権を自分は持っていないということなのだろう。それくらいのことを読み取るだけの学は、イリヤにもある。

かの有名な姫王さま。
この国、グラディスケインを統べる五十七代だか八代だかの王さまがなんと女性、しかも年端も行かぬ少女であるということで大騒ぎになったことがある。
しかしそれも昔の話。今では、仁智勇を兼ね備えしかも見目麗しい《姫王さま》リズリサ・プリマヴェーラに誰もかれもが心奪われ、惜しみない敬愛の意を払っている。無論、イリヤも一国民として姫王さまを敬い、生誕祭にはその年の畑で一番の花を贈っている。

その姫王さまが自分を呼んでいる。イリヤは首をひねった。

そして、手紙の最初――――おそらく自分を指しているであろうその呼称をもう一度見やった。
《親愛なる魔法使いさま》。

遠い遠い昔、賢者と呼ばれる人がいたことは知っている。
彼が王都で、街で、村で、それぞれの発展のために知識を与え、またときには国のために戦ったことも知っている。
そして、ある時を境に、なぜだか忽然と姿を消してしまったことも知っている。

どうやら王都の連中は自分をその賢者さま、レーヴェンシュタインの子孫だと思っているらしい。
大層な人違いだ。

一笑に付してやりたい気持ちは山々だが、何しろ相手は姫王さまおよび本来見(まみ)えることもかなわない王宮の大臣さま方だ。
この誤解をどうやって解けばよいものか……。そうこう考えているうちに、列車が大きくきしみ、止まった。どうやら王都についてしまったようだ。

村の市とは比べようもない人の奔流に飲み込まれもみくちゃにされながら、なんとか駅の外へとたどり着く――――というか、気付いたら流れついていた――――。
駅に迎えの者をよこす、と手紙にはあったが、この雑然とした人ごみの中で、どうやってその迎えを見つければよいのだろう。
おろおろしながら辺りを見回す姿が田舎者そのものに見えたのだろう。時折こちらをちらちらと見やる人が少なくないことに気付き、

イリヤは少し赤面した。

こうなったら、お城まで歩いて行ってやろうか……。

居心地の悪さにどぎまぎしながらそんなことを思っていたら、目の前がふっと暗くなった。顔をあげると、目もくらむような金髪の男が覆いかぶさるようにして立っている。

思わずへどもどしてしまい、あー、だのえっと、だの言葉に詰まらせていると、男は整った顔をほころばせる。

細まる紫眼は、ライラックの花そっくりだと思った。

「お迎えにあがりました」

一話◆『親愛なる魔法使いさま』（後書き）

のんびりと書きたいままに書けていけたらいいなと思います。
表現や言葉の表記に誤りがあるかと思いますがどうかご容赦ください。

二話◆知恵の樹

そこに足を踏み入れた途端、周囲の気温が急に下がったような気がした。

男は手を前にやり、奥へ進めというジェスチャーをする。

深呼吸ひとつして覚悟を決めると、目の前にそびえ立つ大樹のもとへと歩いていった。言葉を持たないはずのそれが、おいでと囁いているように感じたのは果たして錯覚なのだろうかそれとも――――。

そろそろと樹に近づくイリヤの後ろで、男がなにか、祈りの言葉をささやいた。それはイリヤの聞いたことのあるどの祈りとも違う、まるで異国語のような言葉だった。

その祝詞が合図だったかのように、それは始まった。

まるで養分を樹全体に行き渡らせるかのように、幹の中心から淡い光が芽生えていく。

根の一筋一筋に。

枝の一本一本に。

葉の一枚一枚に。

やがてその樹が丸ごと光に満たされたとき。

目もくらむような閃光があふれ出し、部屋中を包み込んだ――――。

――数刻前――

「あの渡り廊下を左に曲がると兵士棟だ」

（ほら、あれが例の……）

「兵士棟」

（いやだわ、ただの平民じゃない？……）

「修練場と兵士たちの居住区がある。たまには顔を出してもらえるとありがたいが」

（姫王さまは何を考えて……）

「……ええ、そうします」

イリヤはそろそろ本気で帰りたくなっていた。

《賢者の子孫さま》は、どこへ行っても注目の的となっていた。

――おおむね、悪い意味で。

突き刺さるような視線と、いやでも耳に入ってくる人々の囁き。そのどちらも決して好意的ではないことは、世間知らずの田舎者であるイリヤでもわかる。

そりゃあ爵位もなければ宮仕えでもない自分がここに居るのは場違いというものだが……。呼び出されて来てみれば、まるで針のむしろに放り込まれたようなこの仕打ち。いくら善良でまっとうな愛国精神を持った人でも、これでは姫王さまに恨みごとの一つでも言いたくなるというものだ。

そんなイリヤの気持ちも露知らず、愛想よく城内を案内してくれているのはライラックの瞳を持つ男、宮廷騎士団を統べるパーシヴァル・ドラジェッド。

（気軽にパーシーと呼んでくれと言われたが、丁重に断っておいたのは正解だっただろう。もしもこの空気の中で気易く愛称など使ったら、今よりずっと居心地の悪い思いをしたに違いない……）

「――――イリヤ殿」

「は」

「気分が悪いのならばすぐにでも部屋を見繕うが」

「ああ……いえ、少し考え事をしていただけです」

「そうか。……あなたは姫王さまの右腕となるお方だ。どうか無理はなさらぬよう」

《姫王さまの右腕》。

イリヤはまた一段と胃が落ち込む気がした。

駅から王宮までの道すがら、馬車の中でパーシヴァルが話してくれたことはかなり少なかった。

（自分は農民の子であり賢者の血筋などではないと主張してみたものの、眉目秀麗な青年には苦笑一つで片づけられてしまった……。）

結局、今のところイリヤが知っているのはたったの二つ。

一つ、イリヤがレーヴェンシュタインの子孫であることを姫王さまは《確信》しておられること。

二つ、イリヤにはこの先、賢者として姫王さまを支える使命を与えられていること。

一体、何の冗談なのだろう。いっそ冗談であってほしいとさえ思った。

魔法だなんて大それた能力も賢者と呼ばれるべき知恵も備わってないことは自分が良く知っている。

それなのに、我らが姫王さまはこの農民風情をご自分の右腕として迎えるおつもりだという……。

投げつけられる悪意よりも、吐き捨てられる侮辱よりも、何より心苦しかった。

「――――イリヤ殿、やはり少し休まれた方が……」

「パーシヴァル騎士団長殿」

「は」

「姫王さまは、なぜ私を呼んだのでしょう」

パーシヴァルの体がこわばるのを感じながら、イリヤはそっと彼

に背を向けた。
これから言うことは不敬罪に当たるのだろうか。罰を受けるのだろうか。
それでもいいと思った。
裏切ると分かっている期待を押しつけてしまうよりは。

「……それは、あなたが……」
「――賢者の子孫だから。……しかし、私はそれを否定しています」
「……。」
「……私自身ですら信じていないことを、なぜ姫王さまは信じておられるのですか」

はっきりと不信の念を口に出してしまったその瞬間、耳をそばだてて聞いていたのだろう《通りすがり》の兵士や貴族がかすかにたじろいだ。
背後に立つ青年は何も言わない。
イリヤも口を閉ざしたまま、両手を硬く握り合わせていた。

気まずい沈黙が破られたのは、心臓の鼓動数十回分の後だった。

「……イリヤ殿」
「はい」

振り向くと、パーシヴァルは（予想とは裏腹に）怒っているわけでも、顔をしかめているわけでもないようだった。むしろその表情は、後ろめたそう、という表現が似合う。

一瞬、ためらうように視線を宙に泳がせたが、すぐにイリヤの顔へと戻すとつかつかと歩み寄り、言った。

「こちらへ」

そのまま、返事も待たずに彼らしくもない性急さで通路を突き進んでいく。事情を聞く余裕すら与えられず、慌ててイリヤはその後を追いかけた。

歩きながらパーシヴァルはごにょごにょと呟いていたが、その声は独り言とも話しかけているともつかない。切れ切れに「説明が足りなくて」とか「決して疑念を抱かせるつもりは」など、すまなそうな声色が聞こえてきたが、はぐれないようにするのが精いっぱいのイリヤはそれに返事をしている場合ではなかった。

やっと彼の足が止まった時、二人は城の地下へと来ていた。

堅牢な扉を目の前にしてきょとんとしていると、パーシヴァルは鍵を取り出して言った。

「あなたが賢者であるというまぎれもない証拠が、ここにある」

そこはぽっかりと天井が空いていて、地下でありながら中庭のように燦々と陽のあたる部屋だった。

緑が生い茂り、花が咲き誇るちょうどま真ん中には、見上げるほど大きい樹が一本植えられていた。

「さあ、中へ」

そこに足を踏み入れた途端、周囲の気温が急に下がったような気がした。

男は手を前にやり、奥へ進めというジェスチャーをする。
深呼吸ひとつして覚悟を決めると、目の前にそびえ立つ大樹のもとへと歩いていった。言葉を持たないはずのそれが、おいでと囁いているように感じたのは果たして錯覚なのだろうかそれとも――――。

そろそろと樹に近づくイリヤの後ろで、男がなにか、祈りの言葉をささやいた。それはイリヤの聞いたことのあるどの祈りとも違う、まるで異国語のような言葉だった。

その祈りが合図だったかのように、それは始まった。

まるで養分を樹全体に行き渡らせるかのように、幹の中心から淡い光が芽生えていく。
根の一筋一筋に。
枝の一本一本に。
葉の一枚一枚に。
やがてその樹が丸ごと光に満たされたとき。

目もくらむような閃光があふれ出し、部屋中を包み込んだ――――。

再び目を開けたとき、樹はもう光ってはいなかった。
その代わり、見過ごすことなど到底できないものが、イリヤの視界に飛び込んできた。

血潮を思わせる赤々とした果実が一つ、目の前にぶら下がっている。

つい条件反射で手を伸ばすと、まるで見えない誰かがハサミを入れたかのようにぷっつりと音を立て、それは手の中に飛び込んできた。
これは、なんだろう。
苺にしては大きすぎるし、他の果実にしては赤い。イリヤがこれまで育てたどの果物とも違うそれをしげしげと眺めていると、背後から声が降ってきた。

「知恵の樹があなたを認めた」

その声は儀式のように厳かで、それでいて興奮を押し殺しているように聞こえた。
思慮深そうなライラックはらんらんと輝き、イリヤと、その手の中にある赤い果実とを交互に見ている。

「それは知恵の実」

パーシヴァルは歌うように囁く。
（この声なら、きっと吟遊詩人としてだって成功できるだろう）
「神々が与えた知恵の結晶にして賢者の遺した知識の証」
そして、イリヤの足元にそっと跪き、果実を持ったままの手を掬いあげ、言った。
「賢者よ、私たちはあなたの帰りを待っていた」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8597v/

姫王さまの魔法使い

2011年10月8日18時08分発行